

「池上線」

西島三重子

東京・池上線

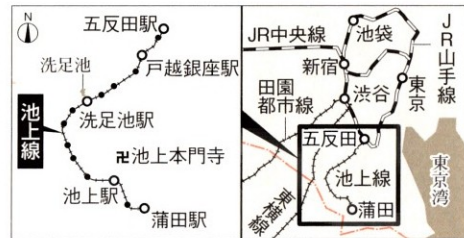
駅に残した切ない記憶

文・中島鉄郎 写真・内藤久雄

山形市の郊外へ向かうタクシーの運転手は、今年もなんとか春が来ましたね、と喜んでいて。街はまだ雪で覆われていたが、日差しは力強かった。情報デザイン関係の会社が集まるセンターに、「池上線」の作詞家、佐藤順英さん（五十五）が社長を務めるベンチャー企業のオフィスはあった。「池上線」以来、多くの歌い手に詞を書いた佐藤さんは一九九九年、東京を離れ、中学まで過ごした山形市へ戻っていた。

「池上線」は、バンドの知り合いだった西島三重子さんが曲をつけ、歌った。七五年九月に出た西島さんの最初のアルバムの中の一曲だったが、じわじわと人気が出て、翌七六年にシングル盤が発売された。

池上線の古びた車内で



住宅街を縫うように走る池上線。満開の桜の下を新型電車がやって来た＝東京都大田区

Song

古い電車のドアのそば
二人は黙って立っていた
話す言葉をさがしながら
すきま風に震えて
いくつ駅を過ぎたのか
忘れてあなたに聞いたのに
じっと私を見つめながら
ごめんねなんて言ったわ
泣いてはダメだと 胸にきかせて
白いハンカチを 握りしめたの
※池上線が走る町に
あなたは 二度と来ないのね
池上線に揺られながら
今日も 帰る私なの※

終電時刻を確かめて
あなたは私と駅を出た
角のフルーツショップだけが
灯りともす夜更けに
商店街を通り抜け
踏切渡った時だわね
待っていますとつぶやいたら
突然抱いてくれたわ
あとから あとから 涙あふれて
後ろ姿さえ 見えなかったの
※をリフレイン

西島三重子さんは、同じころ「私鉄沿線」がヒットした歌手の野口五郎さんが歌うイメージで作曲した。作曲の仕事中心だったので、自分が歌うことになるとは思っていなかった。「フォーク歌手としての自覚や覚悟が出てくる前のアルバムでした」

二人が気まずく沈黙する一番、駅を降り、家まで送られる途中、恋人に思わず抱きしめられる二番。物悲しげなメロディーに、別れの具体的な情景が乗る。

東急池上線は、東京二十三区の南部、五反田―蒲田間一〇・九キロの住宅街を、三両編成、ワンマンカーで走る。十五の駅の間が短い。混雑もそれほどでもない。東京ローカル線といった、のどかな雰囲気をも今でも漂わせている。

当時、若者文化のトレンドは車だった。荒井由実(当時)が、東京郊外ドライブの心地よい疾走感を歌った「中央フリーウェイ」が出た七六年。同じ年、鉄道を舞台にした「池上線」は主に有線放送を通じて人気を集め、じわじわと売れていった。

どの駅前も光景が似ていたため、

〈歌詞に出てくる駅はどこですか?〉

と、西島さんはよく聞かれた。「あなたの心の駅だと思ってください」と答えた。モデルの駅が

明かさないうまま、三十年が過ぎた。



二〇〇七年十二月十六日、五反田を出発する池上線の最後尾の車両で、「池上線」を歌う西島三重子さんの姿があった。東急電鉄が「池上線全線開通八十周年」で企画した車内コンサートだった。「不思議な感じがしましたね」と、西島さんは言う。七六年当時、「池上線」のプロモーションを考え、東急に協力を依頼したが、歌詞を知った東

あるのかどうか、詞の裏側は知らなかった。

現在まで八十万枚が売れ、何人もの歌い手がカバー。七〇年代のフォーク名曲集などには必ず選ばれる定番だ。だが西島さんは、「長い時間をかけて売れたせいか、いまだに、ヒットしたという感覚はないですね」と言う。

ヒットには代償もあった。二人は以後、「池上線」の強いイメージに縛り付けられ、アーティストとして新しい仕事に取り組むのに、目に見えない苦勞を強いられることになった。

西島さんは「一時期、この曲を歌うのが嫌になりました」と明かす。

佐藤さんも、「作詞の仕事が来ると、『池上線』みたいな曲を、と注文された。嫌でしたね。ペンネームで作詞しようと思った時期もあった」。

佐藤さんは山形に帰ってから、時折、「池上線」の歌詞をめぐるマニアたちのネット論議をチェックしていた。「あれはこの駅なのか」「純愛なのか、不倫なのか」。結局、誰にもその「解答」を

急側が、協力を断ったという経緯があったからだ。

「東急さんが池上線の車両を新しくしようとしていた時期で、『古い電車』『すきま風』という詞が、会社の方針にあいませんとしたことだったようです」

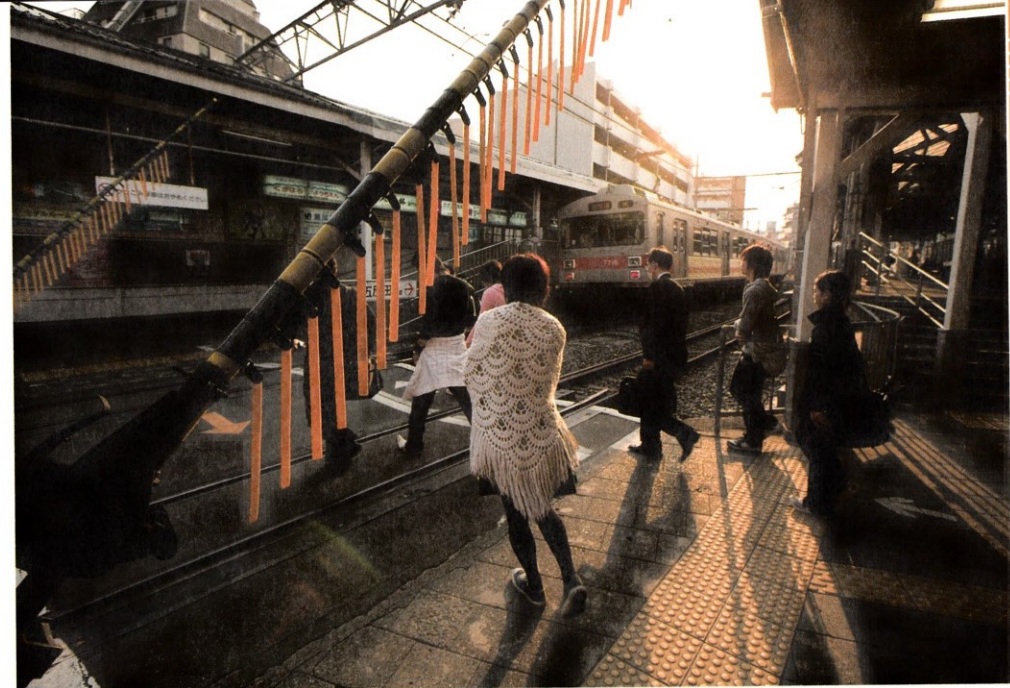
西島さんに車内コンサートを持ちかけた東急電鉄エリア開発事業部の山口友康さん(二十九)は、「昔の経緯はまったく知らずにお問い合わせしたので、『今度は大丈夫ですか』と聞かれました」。

聴く 初期の音源を集めたCD「究極のベスト! 西島三重子」(1500円、ワーナーミュージック・ジャパン)で「池上線」を聴くことができる。同じ佐藤順英さん作詞の「ジンライム」や「のんだくれ」(最初のシングル盤)など全9曲。

02年に西島さんが出したアルバムの中の曲「おひさまのたね」は、子どもの健やかな成長を願う親の気持ちを歌った。歌の趣旨に賛同する学校やコーラスグループに譜面を送っている。同名のミニアルバム(1500円、AMJ)が出ている。



池上線を走った古い電車が、今も十和田観光電鉄で元気に走る=青森県六戸町



昔からの構内踏切が残る池上駅も改築案が検討されている=東京都大田区

東急に長く勤めた「鉄道友の会」東京支部長の宮田道一さん(七十)は、東急は六〇年代半ば以降は、田園都市線沿線の開発を重視し、目が西へ向いていた、と説明する。「映画が封切館から二番館へ行くように、新車両は最初に東横線へ行き、使い回してから池上線に来る時代だった。あの曲のころは、昭和初期にできた古い車両が新車両に負けずに、がんばって働いていた時期だったんです」

七〇年代の「すきま風」を体感したくて、青森県の十和田観光電鉄に乗った。同社では、池上線を走った「東急デハ3655」という車両を保存し、ファン向けに有料で走らせているのだ。四二年に製造され、七三年に「車体更新」(リニューアル)された車両だ。

七百しちひゃく駅から出発した列車が十和田市駅へ向かう直線で速度を上げると、古いドアの上のほうからすきま風が入ってきた。ドアの前で長い黒髪が揺れる姿を想像してみた。「彼女の黒い髪がすきま

風で揺れた」というのが、佐藤順英さんの心に刻まれた忘れられない光景だった。

「池上線」の歌詞は、実話だった。歌詞の駅は、「池上駅」。作詞した佐藤さんが九九年の帰郷直前、二十年ぶりに訪れると、「角のフルーツショップ」はなくなっていた。個人的体験は、タウン誌の編集者に取材で話してしまう〇六年まで、堅く心にしまい込んでいた。

七一年当時、学習院大一年生だった佐藤さんは、他大学の一年生の「彼女」と交際していた。だが、佐藤さんは国連職員を目指し、その年の九月にハワイ大学へ留学。文通での交際が続いていたが、翌年「私だけ待っていることに疲れた」という手紙を受け取った。あわてた佐藤さんは急ぎよ帰国し、説得に努めた。だが、誤解もあり、元に戻らなかつた。

「結局、ハワイ大学には戻らずに辞めて、資金を出していた親はノイローゼ扱い。『作詞家になる』と言ったら、勘当された。気持ちを曲にして彼女



ぶらり

池上線沿線には名所が多い。

池上駅から北に10分ほど歩くと、

日蓮宗の大本山である池上本門寺(写真上)がある。日蓮聖人が1282(弘安5)年に入滅(臨終)した霊跡。戦災を逃れた五重塔は、関東に現存する幕末以前の五重塔のうち、最も古い1608(慶長13)年建立(重要文化財)。安藤広重の「江戸近郊八景」にも描かれた総門などとともに貴重な古建築だ。



多くの参拝客が訪れる2月3日の節分会は、全国でも有数の規模。また、毎月第1金曜日には朗峰会館で、コンサートが開かれている。

洗足池駅にある洗足池は、日蓮聖人が本門寺へ行く前に足を洗ったという逸話が地名の由来。水面の広さは約4万平方メートル。植物園やボート乗り場があり、桜の名所としても知られる。

戸越銀座商店街(写真下)は直線距離(1.6キロ)の長さで知られ、400もの小売店が並ぶ。マスコットキャラクター



の「戸越銀次郎」も最近、人気が出ている。

また、沿線は蒲田周辺を筆頭に、黒湯と言われる天然の温泉が出る銭湯が多い。15の駅周辺にある30以上の銭湯は、それぞれに特徴があり、湯めぐりをしても楽しい。

08年4月、蒲田駅と五反田駅が、それぞれ装いを新たにした。蒲田駅では、隣接するJR東日本がこれまでの二つの駅ビルをつなぐデパート「グランデュオ蒲田」をオープン。五反田駅でも、池上線のホームにつながる駅型ショッピングセンターが「レミィ五反田」(地上9階・地下2階)としてリニューアルされた。

に伝えたい、それだけを思っ書いて

離ればなれになる留学直前、最後のデートで家まで送った夏の日の感傷を、帰国し、あきらめざるを得ないと悟った冬の別離の情景に移し、相手の女性に仮託して言葉を紡いだ。

恋愛の顛末は、思い描いていた将来像も大きく変え、高校時代からバンドを組んでいた佐藤さんは、音楽の道を歩いていくことになった。

ヒット後の二十七歳のとき、彼女を食事に誘った。LPとシングル盤を渡そうとしたが、彼女は持っている、と言った。「就職したメーカーの相手と結婚すると言っていた。それが最後、今はどこでどうしているのか全然知りません」

池上駅は、池上本門寺がある北側にしか改札口がない。かつてフルーツショップが店を構えた角には今は、ケンタッキーフライドチキンがある。そこを曲がり、商店街を抜けて、踏切を渡る。歌詞の通り進んでいくと、住宅街が広がっていた。花冷えの午後だった。少なくともよいなお世

あ』と思っていました。あの方も、ご結婚されていますよね?」

池上駅の改札を抜け、長い木製のいすに腰をかけた。東急沿線駅では最後に残ったという「構内踏切」が鳴ると、人々は急いでホームに向かった。○七年十二月から運行を始めたという、精悍な顔つきの7000系新車両が、ほどなく静かにすべ

話、重く見積もると、犯罪的迷惑、そうは分かりつつも、彼女の消息を知りたくなかった。

住宅街を一時も歩くと、その家が見つかった。転居していなかったのはさいわいだったが、留守だった。取材のお願いの手紙を投函したものの、返事がもらえないまま時間が過ぎ、三十年ぶりに近況を知るといふ企ては、半ばあきらめかけていた。

桜の花びらも散り始めたころ、彼女の現在の連絡先を知る人に偶然、出会えた。聞いた電話番号にかけると、直前に連絡が入っていて、戸惑い、あきれながらも、優しい口調で話してくれた。

二十七歳のときの報告通り、会社の相手と結婚して、二人の子どもは社会に出ているという彼女は、「ふつうすぎるほど、ふつうに暮らしています」。「(曲のモデルの)話は主人は知っているんですが、ごく親しい人にしか話していません。子どもには言ったかどうか……池上線八十周年コンサートの情報を目にし、『どうしていらっしやるかなり込んできた。』

「彼女が社内結婚すると聞いた日から)あのメーカーの製品は、ずっと今も使っていないよ」。独身を通して佐藤さんが、山形で別れ際に冗談めかしてつぶやいた言葉が、電車の中でもしぼり頭から離れなかった。